
〈山羊を愛した男〉

遊牧民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「山羊を愛した男」

【Nコード】

N6374X

【作者名】

遊牧民

【あらすじ】

彼が図書館で見つけた本は、誰かが自費出版した本を勝手に置いていたものだった。

その特異な内容に引き込まれて読む。

近代までヨーロッパで行われていた宗教裁判では、動物にも平等に裁判の機会が与えられていた。

その判例にもある禁断の罪を犯した男の物語だった。

1 (前書き)

1750年のヨーロッパにおいて、ロバと同衾した飼い主の男が裁判にかけられ、検事の求刑通り、死刑判決を受けた。

「常に有徳で行いが正しく、誰ともスキヤンダルを起こしたりせず、彼女が言行ならびに生活のあらゆる習慣において最も正直な動物である」という知り合いの司祭の証言を得て、ロバが主人を誘惑したのではないことが立証されたので、ロバのほうは無罪となった。

この引用の出自ははっきりしませんが、赤子を殺したブタが縛り首になったり、畑を荒らした野ネズミが、妊娠している者を除いて所払いの判決を受けたり、教会内で騒いだスズメも裁判にかけられている。ノアの箱舟に乗っていなかったインガーが、畑を荒らした罪で六日以内に退去するようという不当な判決受けたのも、宗教裁判のゆえか。

さて、山羊と間違いを犯した男の罪はどうなるのでしょうか・・・。そのマイノリティの文化は、かつて農村地区では隠然とあったのです。

ある高名な作家さんは、崖に追い詰めて踏ん張ったところを後ろからと、ノウハウを披瀝しております。

それでも苦手な方は忌諱してください。

彼がよく利用する私立図書館は神社の参道に面していて、ちょうど彼の散歩コースでもあり、会社が休みである土日にはきつと立ち寄る。

そして、書架に囲まれた大きな閲覧机の一角を占めて、時間の移ろいに身を任せて、ぼくと手元の本を眺めて過ごす。読んでいる風には見えない。

まるで本に囲まれて本のおいの中で、森林浴のような安らぎと憩いを得ているかのようである。時折書架のほうを眺めまわすほかはそのようにして、何度も溜息をつく。

児童館は別にあるので、閲覧者は、宿題などをしている中高生に、中年から老年にかけての世代。若者はほとんどいない。若者の活字離れはこういう所からも歴然。

カサコソとページをめくる音がするくらいで、静謐に包まれた空気をうごめかす者としては、しずしずと書架をめぐる閲覧者のほかはいない。

秩序は保たれていた。

この秩序を掻き乱すように、急に彼は音を立てて椅子を引き、手元に広げていた本をたたんで立ち上がった。

窓際の柱に掛かった丸い時計が午後三時を指したからである。いつものことだった。

それにしても静かな足取りで持っていた本を書架に戻し、予てから決めていたのか、その傍の小説本を掴んで司書のカウンターに向かった。

「これを頼むよ」といって、図書カードと一緒にそれを司書に差し出す。

司書は受け取って、バーコードを読み取る機械を片手に、本をいじくりまわした。

「これ……どこにありました？」と、メガネを掛けた若い女性司書は彼を見上げて訊いた。

「小説の書棚だよ」

『山羊を愛した男』という緑色がかった表装の本である。マンガチックな山羊の絵が描かれた、薄手の本。

そのどこにもバーコードがないので司書はいじくりまわしているのである。著者名は“山本哲郎”、司書は頭をひねっていった。

「これは当館のものじゃありませんね」

「おや、そうかい。面白そうなんだけどねえ。それじゃあ、これは借りられないのかね」

「いえ、ちょっとお待ちください」といって女性司書は事務所の中に入って、黒縁メガネの上司になにやらお伺いを立てている。それがガラス越しに見えた。二人はこっちを見た。

やがて戻って来て司書はいった。

「どうぞ、ご自由にお持ち帰りください」

「え？ いいのかい。じゃあ、返却は？」

「ご自由になさってください。返却の必要はありません。そのリサイクルコーナーに置かれてもよいですけど」

リサイクルコーナーには、市民から寄贈された本が並べられている。それは誰でもタダで貰える。以前彼は掘り出しものの、吉川英二全集『新・平家物語』全6巻をそこで手に入れている。

6巻の義経の抄などは二度も読み返したほどの逸品を、タダで手に入れたのは幸運で、たいていは売れない作家のマイナーな本ばかりだった。

「この本を借り出した者はいないということかね？」

「ええ。どなたかが勝手に置いていたものでしょうけど。いえね、よくいるんですよ、自前の本を置いて行く方が。リサイクルのほうに置いてくださればよいのですが、やはり多くの人に読んでもらいたいんでしょうね、作者としては。今年になってからでも、『日本ドロボウサミット』という本や『ハルタちゃんの……』」

その先は口に出していけないのか、女性司書は顔を赤らめて口を濁した。

そこまでくれば「xxxx」しかない、彼は洞察した。

「作者はもしかしてこの本と同じ人？」

「いえ、イヴァンとう方でしたね。ドロボウサミットのほうは、影法師という方、でしたか」

「借り手はいたの？」

「ええ、ですから、差上げました。いつの間にか、リサイクルコーナーに戻されてましたけど、すぐになくなったところを見ると、読者はいるんですね。商業主義から外れたマニアックなものでも、波長が合う方はいるんでしょうね」

といって女性司書は意味不明の笑みを浮かべた。

1 (後書き)

乞うご期待！

物語の性質上作者名を変えてみました。

「山羊を愛した男」

――この物語を塩崎吾一君に捧ぐる――

私は君が港区の児童公園のベンチにぼつねんと座っている光景を今もって忘れることができない。

どうして私がそこに行き合わせたのか記憶にないんだけど、君は私に例によってあけすけにこういったね。

――ああ、びっくりした。刑事が張り込んでいるとは思わなかった。

君は中区の場外馬券売り場で、張り込んでいた刑事らの追跡を間一髪でかわし、そこまで逃げて来ていたんだったね。黒縁メガネ越しの眼差しに、少年のようなツヤを見せて、そのわりかし整った顔で笑いさえた。

私は君がどういう罪を犯して警察に追われていたのか、その夜に店の売上金を持って逃走するまで知らなかったわけだけど、どうしてそんなことを私にいったんだろう。

私が警察に通報するとは思わなかったのだろうか。まあ、その時点では、君が何をやらかしたのか、私は聞きもしなかったから知らなかったわけだけど。

居酒屋の同僚として約半年間、同じ仕事をしている間に彼は奇妙な半生を私に語って、そして、行方を暗ました。彼が若くして――年齢は知らないけど三十まではいつてなかったのではないか――すでに窃盗の常習犯で、日本全国ドロボウ行脚あんぎゃの途次であったことはあとで知ったことだった。

もっとも、彼に限らず、私の前に無防備になる人間はそれまでもいたし、それからもういた。彼は一年間あまり逃げ回っていたけど、

島根でついに御用になったと、店長から聞いた。

将来物書きになろうと思っていた私は、自然に人間ウォッチングしていたのは確かで、興にのせて自分史を語らせるのがうまかった。そしてまた決して裏切らないという、信頼感を相手に与えてしまう天然キャラでもあった。人は私に語ることで、懺悔にも似たカタルシスを得ていたのかも知れない。

ある女は私の前でさめざめと泣いた。拭^{ぬぐ}っても拭^{ぬぐ}っても涙が滲み出て来る底なしの悲しみ——というものを私は見た。人は何と満たされようとして満たされない、孤独で寂しいものか。

同じ職場で働く彼女は、ひた隠しにしていた彼女の事情を私にだけ語った。うら若い身でありながら、ある小銭持ちの商売人のお妾さんになったことを。囲われ家^やの前で、人がヒソヒソ話するのが耐えられないというのである。

私は彼女のささやかな抛り所を、その寂しさというものをなじった。そういう権利がありもしないのに、彼女を底なしの悲しみに突き落としたのである。

またある者は、私の前で震える手でパッケージからザラメのような結晶を取り出しながら、ぶつぶつと、仲介者の手を経るごとに少しずつくすめられているのを毒づき——本来ならパケは四角であるべきなのが、四隅が欠けていた——スプーンのお湯で溶かし、ポンプ〔注射器〕で吸い上げて、硬くなってしまっている腕の血管に打った。

うつとりした顔で私を見て、それが初めて体に入って来た時のズドーンとした感覚を私に語った。そして何の興味も示さないのが不思議でならないという顔をした。

私は、どうして彼が、この上ない美人の奥さんと可愛い幼子を持ちながらなおかつ満たされないで寂しいのか、不思議でならなかった。夜半にクスリを買いに行つて締め出され、大暴れする彼を——彼が柱を蹴ったので店の建物が傾いたのか、店長が柱と柱を見通しながら首をひねっていた——そんな夫を持つうら若い奥さんが可哀

相でならなかった。

しかしもっと気の毒なのが隣の部屋の後家さんだった。壁にゴツゴツ頭を打ちつけながら獣のように交わる若夫婦に、眠りを妨げられ、何とかして欲しいと私にいう。その歯茎をみただけで、いかな若い私でも、慰めてやる気にはなれなかった。

またある労組のアクチブは、スト破りをやって大金をーああ、そうだった。私はそんな人間ウオッチングを語るつもりではなかった。

私はこのほど亡くなられた塩崎吾一君の半生をどうしても語らずにられない。偶然新聞記事で彼の死を知って、その思いを強くしたのである。

勿論名前は仮名だし、彼を知る誰が読んでもーたとえ家族であってもーわからないように扮装を凝らしているから、彼の名誉を傷つけることはないと思う。

場所も大分県の片田舎という設定にした。

2 (後書き)

動物裁判の資料がわかりました。

「動物の刑事訴追と極刑」(邦訳は「殺人罪で死刑になった豚」)
E・P・エバンズでした。

ちなみに、判決文は「我々は、当該の犯罪のおぞましさと恐怖に鑑み、そして規範を作り、正義を維持するという目的の為に・・・当該の豚が首吊り役人によって木の絞首台に吊るされるべきことを述べ、判決し、申し渡し、宣告し、命令する」というもの。

勿論、ロバと交わった男も、「神、全能なる人、父と子と聖霊、そしてマリア、我が主イエス・キリストの最も神聖なる母の名と徳において、そして聖なる使徒ペトロとパウロの権威によりて」処刑されたのである。

吾一少年には戸籍というものがなかった。

彼は1億2千何百万人余の日本の総人口の中に入ってなかった。員数外だった。

どうしてそんなことになってしまったのか、端的に言えば出生届けが出されなかったからである。

離婚直後に産まれた子が、あるいは親の放恣から、そういう目に遭うことはママあるけれど、彼の場合は不義の子であったから、母親が出生届を出さなかったものらしい。

ほかに兄弟が四人いたけど、末っ子の彼だけユウレイのような存在で、義務教育も受けずに野放図に育った。

母親の死後、一〇歳で家出してからというものの、腕一本のドロボウ家業で凄いで、独りで生きて来た（のではないか）。

驚いたことに、二二歳の時に初めて警察に捕まり、そこで出生届を出すようにいわれた、晴れて日本国民の一員となった（と彼は私に語った）。

そこで一度清算されたはずだけど、身に付いた盗癖からは逃れられず、それから彼は就業しながらドロボウに励むという、変則的な生き方に変えたのかも知れない。

彼の計算では――彼は無学で、字も満足に書けないけど、そうとう頭はいいと思われる――一つ処に留まるのは三ヶ月が限度、それ以上いるのはヤバイという哲学を持っていた（ようだ）。

私の同僚だった時は、例外的に半年間いて、危うく御用になりかけたのである。

彼は刹那的な生き方しかできない逃亡者だった。

コソ泥で稼いだ金はギャンブルで消費していた。一発当てて、足を洗いたいと思っていたのではないか。

賢い彼は、リスクの高い、強盗などを軽蔑していた。

そして彼の口癖は、“鍵は二つ以上取り付けること”だった。その忠告を聞かなかったばかりに、居酒屋の店長は彼に売上金を奪われたのである。

そしてまた彼は短期間に女をものにする天才だった。

彼の語るところによると、一人毛並みの違った彼は、異父兄弟たちと折り合いが悪く、一〇歳で家を出てあてもなくさまよっているうちー驚いたことに彼は墓場の中に寝泊りしたというーとある後家さんに拾われて、一二歳までの二年間を、愛玩動物のように可愛がられて過ごした。

戸籍のないユウレイの彼がいなくなったとて、騒ぎ立てる者は誰もいなかった。思春期に入ってから、そのウニのような存在に辟易して、後家さんから逃げ出したのだという。

ウソかホントか知らないけど、彼が女を喜ばす術に長けていたことは確かだ。それが頑是無い彼が生き延びる術でもあったのかも知れない。子供の彼が、あっちこっちの女を渡り歩いて大人になった。その話は非常に興味深いけど、話を元に戻そう。少年吾一に戻そう。充分に堪能していただくためには、そこから始めなければならぬ。

少年吾一の家には、赤犬と猫が各一匹、放し飼いのニワトリが十数羽、そして、メス山羊が一頭ーの動物たちが飼われていた。

この数と、この構成は、ずっと変わらなかった。

それに生り物としては、柿の木が、江戸柿・冬柿・小春、ジュウレン・熟柿のハチャ等が、畑の畔に植えられていて、他にも、クリや、ウメやサザンキョウやイチジクなども、畑の中といわず畔といわず、荒地などにも植えられていた。

加えて、家の庭にグミの木が三本季節になると赤い実をたわわにした。悲しいかな、ナシとビワはなかった。

それらが、五人の子供らのペットであり、脂肪や、タンパク源であり、ミネラルであり、オヤツだった。山羊の乳で育った子もいる
〈吾一もそうだった〉。

上の兄弟たちは学校から帰ると、まず柿の木に上って柿を一頻り食って、それから母親の手伝いに出かけた。

末っ子の吾一は学校に行く時期が来ても、学校から連絡は来なかった。彼は存在していないことになっていたのだ。

新一年生は運動会で、お菓子がいっぱい付いた旗を取りに走るのに、彼は指をくわえて見ていなければならなかった。

彼は母親について野良仕事に行くか、村の子供らと遊んでいるか、独り遊びしていた。

近所にボヤツとした女の子がいて、彼より二つ年上だけど、その子も学校に行つてなかったから、神社で一緒に遊んだ。

一度暗くなるまで遊んだことがあった。

――吾一はサヨコとお宮でx x xしよったんで。

と、柿の木のテッペンに上った三つ年上の女の子からからかわれた。汚いパンツをのぞかせて、柿の木には大小の子供らがサルのように取り付いていた。

そのくせそいつは、囲いのない五右衛門風呂に入っていて、――母ちゃん、吾一がチンチン見るんで、といった。

それともう一人、三つ年上の男の子と遊んだ。この子も少しボヤツとしていたけど、学校には行っていた――けど、ほとんど途中の石切場に隠れていた。

そいつの弁当欲しさに一緒になってボヤツとして過ごした。その子の家は大百姓で弁当は憧れの銀シャリ、ある日、その頃は珍しい肉のオカズまで付いていた。

吾一はヨダレを垂らして、最後の一切れがそいつの口の中に入ってしまうまで、見ていた。

その前の日から家の赤犬・フジが姿を消していた。家の者みんな

で探したけどいないので、きっと犬殺しに持って行かれたのだろうということになっていた。

村にはともすれば赤犬を食料にする者もいた。フジが弁当のオカズになったことは、兄たちの一致した意見だった。

村に七つ年上の男がいた。

この男が道端で豪快に立ち小便をしていた。

しかしどうも様子がおかしかった。

吾一がのぞくと、小便の代わりに白い液をピュッと出した。

どういうわけかそれをタネだと思った。幼い吾一がどうしてそう思ったのかわからないけど、もうこの兄ヤンは子供を作れないだろうと思った。

一三歳までそう思っていた。

しかしこの時、この兄ヤンが家の「メー助33世」を狙っているとは夢にも思わない吾一であった。

メー助33世とは、家で飼っていたメス山羊のことである。

少年吾一の仕事は、山羊を毒草のない草場に連れて行って繋いでおくことと、昼中に一度だけ放し飼いのニワトリにエサをやることだった。

山羊はメエエツといって頭を擦り付けてきたり、イタズラにシヤツの裾を噛んで引っ張ったりした。決して、幼い吾一を角で突いたりはいしない。

少年吾一が興味本位に局部を覗き込もうとしても、プルプルと尻尾を振るだけで、――いやだよ、この子は――と、やさしく振り向いてたしなめるぐらいであった。

これが他人だと、特に不純な目的で近付く男には一転、硬い頭を下げて、鋭い二本の角を向けて戦闘体勢に入る、さすがに七つ年上の兄ヤンも近づけたものではない。

ややもすると、寝そべって片足を上げ、赤いニンジンのようなチンチンを舐めたりしてどんどんむき出す赤犬・フジとは大きな違いであった。

奥ゆかしく貞節で、みだりに人を誘惑しようとする態度は微塵も見せず、時には乳を与える乳母のような慈愛のこもった眼差しで吾一を見た。寝そべっていても、時折顔を上げて、――ぼうや、危ないところに行くんじゃないよーと、メエエエと鳴く。

乳の出が悪くなった母親の代わりに、吾一などはこの山羊の乳で育ったのである。

ニワトリたちは好き勝手に家のまわりで常に何かを突ついているか、足で土を掻いていた。少年吾一は近所の子供らと遊び呆ぼけていて、エサをもらえないことのほうが多い。

しかし恒常的にカルシウムが足りないのか、時にはブヨブヨのタマゴをお尻にぶら下げて歩いている光景も見られた。それをほか

の連中が追い駆けて突いて食べる。

こういう光景が見られると、吾一の母親はどこから貝殻をもらってきて、細かく砕いたのを撒いて与えるのである。そうすると真っ白な硬いタマゴが、家の床下に散見される。

これをいち早く拾わないと、青大将に盗まれてしまう。それも吾一の仕事なのだが、遊びのほうに忙しく、たいていは学校から帰った兄や姉たちが拾って、生で吸ってしまう。

タマゴを生まなくなったニワトリは首を捻られて食用となる。関節から下の足は子供らのオモチャになった。腱を引っ張ると、足の指が開き、緩めると閉じる。

ニワトリは白色レグホンで、名古屋コウチンのオスが必ず一羽いた。

これが猛り狂っていて、ちようどお神楽の鬼の舞のような動きをして、道行く人々を威嚇する。

殊に郵便屋さんを目のカタキにしていた。赤い自転車を通りかかると――郵便屋さんはそっと通り過ぎようとする――タタタと、どこからともなく走って現れて、追い駆け、背中に飛び蹴りを食らわす。

家には常にフジと呼ばれる赤犬がいた。村人に食われたフジが何代目か知らないが、ようやくヨチヨチ歩きするぐらいになった吾一の、子守をしていたのもフジだった。

山羊のメー助33世は――これも代替わりしても、常に子供らによつてそう呼ばれていた――メエエと鳴くだけだけど、犬のフジは実際に行動を起こした。吾一が危ない岸なんかに近付くと、また車なんかが近付いてくると、セーターの袖口を咥えて安全な場所に連れて行く、というようなことをした。

このように、家で飼われている動物たちと子供たちとは密接な関係にあった。

ああ、それからミーと呼ばれる三毛猫の親子もいたようだ。すぐに子猫はよそにやられたようだ。

猫は概して独立独歩、腹を空かせた時だけミャミャ煩くいつて頭を擦り付けてくるけど、捉まえられて、高い高いなどをされると、迷惑そうにキョロキョロしているが、スキを見て飛び去る。

寒い冬には布団にもぐり込んできて、ゴロゴロいつている。その時ぐらいである、頭を撫でようが鼻をつまもうがおとなしくしているのはーーたいがい子供をバカにしている。

だが動物どうしの意外な連係が見られたのは台風の夜だった。

5 (前書き)

前回の連携を連係に訂正します。

動物を飼っていると、動物たちにもちゃんと心が備わっていて、感情さえあるのではないかと思える。

私事で恐縮だが、イーそれぐらいの遊びはあっても許されるのではないか。イー冒頭、エピグラフに示したように、これは我が友人にして赤裸々な自然人であらせられた塩崎吾一君に捧げる物語であり、できるだけ彼の語ったままを、ナチュラルに書き綴ることを旨むねとしている。イーにしても、そこに私流の解釈が加わることは避けられないことである。

そこで動物たちの心を知る上で、我家の動物たちの例を挙げようと思う。

妻が、どこからかヨークシャテリアの幼犬へオスを貰って来て飼うようになった。私は室内で犬を飼うのは快きらいよしとしなかったけれど。

それが、成犬になった頃、幼猫ともいえない頃合いの子猫が、居間から見える濡れ縁のガラス戸に取り付いて、パフォーマンスをやりだした。

アメリカンショートヘアのメス猫だった。この手の猫はどれもこれも同じ格好をしている。

それがとても可愛いので、家族が見入ったわけであるが、飼い犬のロンは心穏やかでなく、盛んに吠え立てた。

子供の一人が戸を開けると、子猫は臆面もなく縁に上がり込んで人懐こく鳴いた。捨て猫であることは一見してわかった。

ロンのほうが先読みしていたのだろう、これに飛び掛って行って頭突きを食らわして落とす。イーというようなことを何度も繰り返した。両者の心の内が手に取るようにわかった。

子猫は何度突き落とされても、執拗に這い上がって来る。

そうこうしているうちに、子供らがその子猫を飼おうといいだした。

——あんたらの食い扶持が減ってもいいの？

——うん、いい。

ということ、その子猫にリンリンという名前を付けて飼うことになった。

種の違う動物がジャレあって遊ぶ様は、なんともほほえましく、癒された。しかし、彼らの間の序列はキビしく、どんなことがあっても、リンリンはあと入りの妹分としての分をわきまえていて、ロン先輩に楯突くことはなかった。

発情期に腰に取りつかれて、盛んに腰を振られても、迷惑そうにするだけだった。たまに、機嫌の余程悪い時、寝転がって大胆に急所の白い腹を見せ、コブシのように握った手で——決して爪は出さない——兄妹ゲンカの素振りを見せることはあっても。

ロンもそれ以上は踏み込まなかった。鋭い牙と鉤爪にかかったら——その脅威を、本能的に感じているに違いない。

可愛さではどうしてもリンリンには適わない。私がリンリンを抱くと、ロンは恪気りんきして、いても立ってもいられないという風に吠えた。その表情はおかしいほど、心の内を表していた。勝ち誇ったようなリンリンの表情も。

我家では、妻・私・息子・娘・ロン・リンリンというキビしい序列が形成されていた。

これに孫が加わってから、この序列がややこしくなったのである。どうしてもロンは孫を序列の下に見て、頭突きを食らわしたり、甘噛みしたりして、目が離せない。私が孫を抱くと、例によって恪気して吠えた。

リンリンはしかし金のかかる猫だった。犬のロンは一度ニオイ袋を腫らしたただけで、リンリンには何度も病院通いをさせられた。

電車の風圧に吹き飛ばされて足を折ったこともあり、手術代が八万円もかかって、家計を圧迫した。

何度か子供を産み、その都度、保健所に連れて行くのは忍びなく、人にやるか、野山に捨てるかした。避妊手術を施すほど、家計に余裕がなかったのだへ何しろ私は、ドンブリ勘定の商人だった。

わりと近場の墓地公園に捨てたら、ワワワといいながら五匹の子猫を引き連れて帰って来て、私の手を噛んだ。その時の目には、私が恐怖を覚えるほどの、怒りが込められていたへ実際の話が。

その中のオスメス二匹だけ残して、ほかは捨てたのであるが、またリリンが病気になり、妻の手を噛んで、最期の息を引き取ってからは、その二匹が飼い猫となった。

弟猫のほうはヤンチャで近隣に迷惑をかけるので、遠くの荒地に捨てた。車でそつと様子を見に行くと、イノシシのウリ坊と一緒に遊んでいた。

不憫に思って後日連れ帰った。

犬のロンが大喜びで弟分を迎え入れて舐めまわした。姉猫のミーシャは、異性として警戒しているのか、兄弟という認識があるのかないのか、わりと冷淡だった。

そのうち、ミーシャがエイズに罹り、日に日に痩せて、目ヤニや、血の混じったヨダレを垂らすようになった。力関係も逆転して、エサの順番も弟のブーヤンが先になりーその間ミーシャは頭を押えつけられていた。

歯がガタガタになっていて、キャットフードを難儀しながら横を向いて食べていた。いつもブルブルと震えていた。

ある寒い日だった。

痩せこけ、毛が抜けてまばらになった汚らしい地肌を見せて、ミーシャが布団にもぐり込もうとした。目は目ヤニで潰れ、口からは血糊の糸を引いている。

私は可哀相だけど、家の外に出した。それを横目でブーヤンが見ていたのだろう。

あくる日、ミーシャは凍え死んでいた。

それっきり、ブーヤンも姿を消した。

以来、我家ではもう犬も猫も飼わないことにしている。その資格はない。

とはいえ、癒されたいので、今では金魚すくいですくった金魚八匹を飼っている。一匹はコイのように大きくなっている。頭を撫でてやると喜ぶのでー足音だけでも撥ねて喜ぶー彼らにも感情はあるのだろう。

それに、六歳を頭^{かしら}に四人の孫、これはもういうまでもなく癒される。

話が随分私的に横道に逸れてしまったけれど、それらを踏まえた上で、吾一少年の家の動物たちの実情を見ていただきたい。

話を元に戻そう。

そうだった。台風之夜、吾一少年の家の動物たちに起きた事件について語りかけていたのだった。

台風というのは、農作物などに甚大な被害をもたらし、それさえ来なければ死なずに済んだ者が、きつと何人か死んだりする招かざる客だけど、子供らにとっては、ワクワクするスペクタクルであり、多くの恵みをもたらしてくれるイベントであった。

それは今も昔も変わるまい。まずもって学校が休みになったりするのが学校行きは嬉しくてたまらない。幼児はふだんいない兄や姉がいるのでこれまた嬉しくて、風雨の中を一緒になってハシヤギまわる。

不思議と夜半に最盛期になり、電気が消えて、ロウソクの炎の中で夕食を食べたり、寝る前は、なんだか嬉しくて、外の暴風雨と同じように、布団の上で兄弟が暴れて遊ぶ。布団に入っても、家族が一緒くたになって寝ることなどメツタにないことだから、興奮してなかなか寝つけないものである。

夜が明けると台風も通り過ぎていて、あっちこちに水溜りができていたり、木の枝が折れて道を塞いでいたり、川が氾濫して田んぼに水が上がり、取り残されたフナやウナギや時にはコイなどが田んぼの中を泳いでいたりする。

そして何より、生^なり物が落ちているのを拾う楽しみがあった。ナシやクリや枝折れしたカキなどをわれ先に拾う。余所の木に生っている物は余所の物でも、いったん枝から離れてしまえば誰のものである。ないーという子供流の解釈によって。

だが、その年の台風は少年吾一の家に変なダメージを与えた。収穫前の稲をなぎ倒し、刈り取った稲は根こそぎ流されていた。ほかの農作物も大打撃を受けた。

それらの事情はしかし大人の世界のことであり、茫然と佇む母親の姿なんか目に入らない。少年吾一にとってショックだったのは、名古屋コウチンが死に、赤犬・フジと、そして、メー助33世が大怪我をしていたことだった。

台風がもたらした災難ではない。台風の喧騒に乗じて、野犬の群れが吾一少年の家の家畜を襲ったのである。

それに先駆けて、神社脇の草場に繋いでいた子山羊が野犬の群れに食い散らかされていたことがあった。その日に限って母親のメー助33世を、吾一が別の所に繋いでいた。

部落の子供らの家から夕方帰って見ると、杭に繋いだリードと首輪だけが残っていて、そこらに血の付いた草が散乱しているだけだった。繋がれているから逃げもできず、角もない子山羊はなす術もなく野犬の餌食になったのだ。

可愛い子山羊を失って、幼い吾一がどんなに悲しい思いをしたであらうか。想像に余りある。

その味をしめた野犬の群れが、今度はニワトリを狙ってやって来たのだろう。ニワトリは放し飼いで、床の下をネグラにしていた。

結果的に犠牲になったのは、猛けた名古屋コウチンのオスだけだったけど、犬のフジとメー助33世が負傷していたことからメー助33世の角には血が付いていた。彼らがメンドリたちを守ったのではないかと思われる。それが家族の一致した意見だった。

メンドリたちはメー助33世の小屋に逃げ込んで無事だったのである。名古屋コウチンも羽根を散らして勇敢に戦っていた。フジもあっちこっち咬まれていた。

そして、メー助33世は後ろ足の、右太もと、左関節を噛まれて重症だった。傷が癒えてからも、ビッコを引くようになった。

やや暫らく関節に添え木をしていたのであるが、この機を逃さず、

例の七つ年上の兄ヤンが――年が明けてもやっぱり 七つ年上だった――なにくわぬ顔で近付いて来たのである。

兄ヤンは、どうしても新機軸を試さずにはおかないというような顔つきをしていたのだけど、無論、少年吾一にその意図がわかるはずもなかった。タネを出してしまってバカなやつだと思っていた。

八歳の少年でも誰に教えられたわけでもなく、そういう秘め事遊びは知っていたけど、兄ヤンが幼い少女相手にそういうことをしていたことも知っていたけど、サイズが合わないからといって、まさかメー助33世で試そう――としているなんて、思いもしなかったわけである。

台風以来急速に距離が縮まったニワトリと山羊、藁を敷いた山羊小屋が余程気に入ったのか、以前は牛小屋だったので広い、そこが安全だと思ったのか、ニワトリらはそこで寝泊りするようになった。タマゴもそこで生んだ。

もともと山羊とニワトリの距離は近かったけど、それは微笑ましい光景であった。ヒヨコなどは山羊に寄り添って寝た。

でも、ニワトリは所構わず糞をするから、それがとても臭い、藁がすぐに汚れてしまう。藁を取り替えたり、小屋の掃除をするのは三つ上の兄の仕事だった。

一番上のへすでに大人の、兄がその隣にニワトリ小屋を設えるまで、そういう状況は続いた。恐い思いをしたメンドリたちはもう床の下に戻ろうとはしなかったのである。

少年吾一にとって悲しいのは、午後になると家の前の道を、三々五々、学校帰りの児童が通って行くことである。

赤白の運動帽を被ってランドセルを背負ったのが、習ったばかりの唱歌を歌いながら通る。

ーチーチーパッパ、チーパッパ……♪

ーゲロ・ゲロ・ゲロ・ゲロ・クアッ・クアッ・クアッ……♪

ーなのはなばたけえに、いーりーひうすれ……♪

という高尚な歌に対抗して吾一は、

ーまたくらけんの、xxxぐら！

ーあのねえちゃん、きれいだね、でも、チンチンくさいよね！

ーしろじにあかく、きなくそひって、ああ、きたないな、おや

じのけつは……♪

というような下品な俗歌で応じるしかなかった。

しかし、歌謡曲などは彼らよりよほど知っていて、何しろ吾一が付き合うのはみな年上だったから、その点は鼻高々だった。

字の読み書きについては、兄姉の教科書のお下がりで独学した。わからないところは、母親に聞き、兄姉も気まぐれに教えてくれることもあった。だから平仮名は大方読めたり書けたりした。

習ったばかりの漢字を地面に書いて自慢する子がいた。地面に棒で「木」という漢字を書いていう。

――これ何んち読むか知っちゃん？

無論、吾一は知らない。ほかの子が「き！」という。

悔しいから、そこに横棒を足してへそれが偶然に「本」になった。
▽。

――ほならこれはや？

というと、いっせいに「ほくん！」という答えが返って来た。それが吾一が最初に覚えた漢字となった。

午後からは、そのように学校から帰った低学年の子供らと遊ぶことができたけど、午前中は、母親や、一番上の兄と二番目の姉について野良仕事に行くか、独り遊びするしかなかった。

大人たちが過酷な労働をしている間中、少年吾一は赤犬・フジと野山を駆けまわって遊んだ。

山に分け入れば、色々な小鳥の囀りがあり、コジュケイのけたたましい鳴き声があり、腐葉土の芳ばしいにおいがして、あるいは新緑の爽やかな香りがして、ゴーツという山鳴りがして風が梢を揺らして通る。

イチゴやアケビやヤマモモや山ブドウや笹グリなど、季節の色々な食べ物もあった。

田んぼではドジョウが手づかみできたし、小川ではドンコやハヤなどがたやすく釣れた。

四季折々の色合いを見せる大自然の中で、何の屈託もなく遊んだその時期が、少年吾一の一番幸せな時期だったに違いない。

木登りが大好きで――茂った枝の中で昼寝することもあった――木を見ると無性に登りたくなる。

登ったり下りたりしているうちに、不思議な感覚を覚えたのは九歳になってからのことだった。

その時にはきつと、ある同じ年頃の女の子の顔を思い浮かべた。どうしてそんなことが起きるのかわからなかった。

でも、七つ年上の兄さんには教えてやらないと思う。

吾一が九歳の時に上から二番目の姉が嫁に行っている。

その辺りから彼の幸福に翳りが見え始めたようだ。

長女の姉が嫁に行ったからといって――それなりの感傷はあっただろうけど――それゆえ働き手が一人減り、その分、母親と一番上の兄の負担が大きくなったわけだけど、それらは大人の世界の事情であり、少年吾一にはさほどの影響はなかったであろう。

彼にはまだ中学を卒業して都会に働きに出たばかりの三番目の兄と、中学生になったばかりの四番目の姉がいた。この辺りまでが彼の世界を構成していたと思われる。彼のエピソードに登場するのはこの二人までだった。

だが、それが原因で母親が病気になってしまい――長女の実在はそれだけ大きかったのだろう――年末に過労で倒れて、翌年の五月に腸閉塞で死んだ。そこで家族は空中分解、バラバラになって、一〇歳で、戸籍がなく、引き取り手もない、少年吾一の放浪が始まるわけである。

だけど、その前にまだもっと、彼が幸福であった時期を、濃密に語っておきたい。そうでなければ、彼の人生は浮かばれない。他人が勝手に人の幸・不幸を忖度そんたくすることはできないけど、以後の彼の人生が幸福であったとは、とうてい思えないのである。

その証拠に、彼が目輝かせて語るのは、その時分の楽しかった思い出ばかりで、何度も同じことを老人の繰り言のように、面白可笑しく私に話して聞かせた。その時の彼はまさに少年そのものだった。

いや、そうではない。彼は少年のまま大人になったような男だった。口角を上げて、いかにも少年ぽく笑う。実年齢より随分若く見られた。

それに騙されてーというか、たいていの女が、警戒心を持たず、無防備になって、付き合い始めてまもなく深い関係になってしまふのである。

彼の、“同じ処に三ヶ月以上いるのはヤバイ”という哲学は、一つにはそれもある。女の腹が膨らみ始めた頃にはもう彼はいないのである。

ある喫茶店のウェイトレスに冗談で聞いた。

ーデキタンじゃないの？

……うふふふ、いやゝねえ、わかる？

ー誰の子？

ー誰の子って、吾一君に決まってるでしょ。

ー彼ならもういないよ、店の売り上げ金を抱えて逃げた。

ーえ・え・えゝつ、そ・そんなあゝ！

といった按配だった。

彼にしたら、私というヒーラーがいて、黙って何でも聴いてくれる者がいたから、禁則を破ってつい六ヶ月も長居してしまい、危うく、刑事に捕まるか、女にしがみ付かれるかの瀬戸際だったのである。

ーああ、また話が逸れてしまった。話を少年吾一に戻そう。

おおむ

概ね、彼の話は性にまつわる話が多いのだけれど、そういう経緯で学校にも行かず、学校生活という大きな要素が抜けており、それを埋めるのは、七つ年上の兄ヤンという中学を卒業してブラブラしている野放図な少年と、ただひたすらボーとして時を過ごす三つ年上の少年、それに、目の前で尻をまくってオシッコをするボヤツとした二つ年上の少女、との交流が主だったので、いきおいそういう興味に走ったのは致し方ないことだろう。

だからといって、木登りばかりしていたわけではない。七つ年上の兄ヤンとて、メー助33世の隙を窺ってうろついてばかりいたわ

けではない。

自然はあまりにも豊饒ほうじょうだった。子供らを育はぐくむ揺籃ようらんだった。

狩猟民族の血が騒げば、小川に釣りに出かける。たちまち、ドンコやフナ、ハヤ、ウナギ、ナマズ、川エビ、毛ガニ、などが何十匹となく釣れた。手づかみもできた。

どこの家にも台所から流れ出す排水溝の付近に、ジメジメした箇所があり、そこにウジャウジャミミズがいた。落ち葉をはぐれば、ウナギ用の大きな山ミミズもいた。小麦粉をねってハヤ用のエサとした。

サオは竹で、ふんだんに生えている。雑貨屋でテグスとハリとナマリを買えばすべて揃う。ウキは萱の芯を使う。

食用になるのは、毛ガニかウナギくらいなもので、ほかは、笹の枝に通してぶら下げて歩き、それで満足し、そして、投げて棄てて腐らせた。

七つ年上の兄やんはウナギを釣るのがうまかった。大きなウナギ用の釣バりにタコ糸、サオは女竹の先っぽのほう一メートルばかりを用い、山ミミズを大きなハリにつけて、サオの先っぽに刺すのである。

サオとタコ糸を握って、田んぼの水口の所の石垣の穴に誘うように動かしながら差し込むと、ポクと食いついて、もの 凄い力で引っ張る。ガジガジとしたら毛ガニである。

吾一もその技を習得した。

ウナギを釣って帰ると、母は喜んだ。早速、まな板にウナギの頭をクギで打ち付けてさばく。ウナ井となるのだが、子供の口には合わない。ヌルヌルした気色悪い姿を見ているし、麦と米半々のパサパサしたご飯には合わなかった。

まづもって、押し麦はサエコのアレのようだった。

それでも寝込んでいる母には滋養になるといって、時々里帰りし

た姉やが、頭を撫でてくれるのが嬉しかった。サエコのアレがいっぱいあるところを避けて、銀シャリのところをよそおってくれた。

野山では罾を仕掛けて小鳥をたやすく捕らえられた。宮崎では、“地打ちと”呼ぶらしいけど、吾一の地方では、“ウツツメ”といった。少年が釣りの次に覚えるのがそれである。

だけどこれは習得するのには時間がかかった。なかなか鳥が罾にかかってくれない。エサのモミを取られるばかりだった。モミは収穫したあとに、落穂拾いしたり、藁に混じっているのを探す。

たいていは大きな鳥にーカラスなどのー足で仕掛けを弾かれてからまんまとやられる。

それでもたまに獲物がかかっている時があった。モズに食われて羽根だけが散乱していたり。七つ年上の兄ヤンは、“生かし”という小鳥の首が絞まらないような工夫をして、生け捕りにした。

それも頻繁に見回らないとモズなどの猛禽類にやられる。兄ヤンはあっちこっちに七つも八つも仕掛けを拵えてー木の枝にもー見回るのを日課にしていた。

吾一は藪の中を好んで仕掛けた。ツグミなどの少し大きな鳥はそういう所にいる。それもあるけど……。

三つ年上の兄ヤンは学校に行かないで藪の中でただボーとしているけど、何を考えているのだろうかと思うけど、その気持ちもわからないでもない。

藪の中は冷たい風を避けられるし、日向ぼっこができて、そしてなんだか木に登りたくなったりする。

もっと簡単な方法で小鳥を捕まえるのは鳥モチを使用することであつた。

鳥モチは、モチの木の皮を剥いで、それを小川のせせらぎの中で石と石で搗く。猫柳が銀色に輝いて揺れていたたりする、冷たい水の中で。

吾一には、ニツケの木同様に、モチの木を見分けることがどうしてもできなかった。山にはよく似た木が一杯あるのだ。それも七つ年上の兄ヤンに教えてもらうしかなかった。

搗いたモチの粘りは相当なもので、髪の毛に付こうものなら、切り取るしかないくらいだった。

それを木綿糸に巻きつけて刈り取られたあとの田んぼに仕掛ける。ヒワやムクドリなどの群れが落穂を狙って舞い降りるのを、遠くから見つめていて、かかるのを待つ。

雪が降ったあとなどは面白いようにかかった。ムクドリは少し大きくて、食べようと思えば食べれないこともないけど、ただ狩猟の本能を満足させるだけのものだった。

ヒワは黄色い可愛い嘴をしたメジロのように美しい鳥だった。でもホオジロなどもそうだけど、鳥かごで飼っても、すぐに死んだ。逃げようとして何度も何度も竹ヒゴにぶつかり、鼻から血を流して死んでしまうのである。

鳥かごも自分らでヒゴを拵えて作るのである。それも吾一などにはどうしてできないワザだった。

その頃の少年たちの必須アイテムは、肥後守という小刀と、ビー玉と、面子と、クギだった。そのうちのどれが欠けても、それを必要とする遊びには参加できない。

男女で遊べるボール遊などは、ボール玉を誰か一人でも持っていればよかったし、石蹴りの石も、瓦の破片などがふんだんにあった、大人気の漫画本も誰か彼かが持っていて、見せ合えばよかったけれど。

吾一もそれらのアイテムは一応みな持っていた。小刀は一番小さな肥後守だったし、憧れの五寸クギというわけにはいかなかったけれど、大小のビー玉に、派手な武者絵が描かれた面子もー吾一の地方では面子のことをベタとかパツチンとかいう、余所ではメンコなどと、よくもそんな恥ずかしい呼び方をするものだと思っていた。恥ずかしいといえば、いつも音楽の授業が始まる前に、女の先生がオルガンで、ーーたんたんタヌキのキンタマはー、風ーぜもないのにぶーらぶらー♪ーという曲をすました顔で弾いていた、恥ずかしくないのかと不思議に思ったものだへいや、これは私事でした。

小刀は物を切ったり削いだりするのに欠かせない。大・中・小があつて、少年たちにとって、その大きさが自慢だった。

小刀一つで大概の工作ができた。これに竹引き鋸が加われば、立派な鳥かごもできたのだ。ブリキにクギで穴を開け、そこに小さく割った竹を通せば、丸い竹ヒゴができる。

七つ年上の兄ヤンは、なにかにつけ器用で、鳥かごはおろか、どこからか空気銃を作る技術も習得して来て、コウモリ傘の心棒を銃身にして、立派な空気銃を拵えた。

オモチャのピストルの火薬を使用、弾は実際の空気銃の弾を使う。かなりの威力があり、それでスズメを撃ったり、イタズラにネコを

撃ったりした。パシッという音がして、横っ腹に弾を受けたネコは一メートルは飛び上がった。

吾一はそれが欲しくて欲しくてたまらなかった。その為には例の秘密の楽しみを教えてやってもよいと思った。

だが、怪我人が出て、空気銃は大人たちに取り上げられ、弾は、少年らには売られなくなったのだ。

鳥かごといい、柳の皮を擦って刀の鞘を作る技術など、幼い吾一にはどうしてもままならなかった。

やはり小学生くらいの子らと遊ぶしかなかった。屋根にボールを投げて遊ぶボール遊びや、カカシの格好に描いた枠内で 石を蹴って遊ぶ石蹴り、定番のかくれんぼや鬼ごっこなど、我を忘れて遊ぶ遊びには事欠かなかったけれど、今一物足りなくなっていた。

パッチンもビー玉も、漫画も、それなりの楽しさはあるけれど、七つ年上の兄ヤンと遊ぶようなワクワク感に欠けていた。

つまりは、そんなガキの遊びには満足でなくなったのだ。だから兄ヤンが、ついて来いといった時、夜だけど、ためらわずに、うんといってしまったのだ。

夜といっても八時頃だから、母親にはなんとでも言い訳ができる。夏だったから、まだ野良仕事から帰ってない可能性だってある。

だけど、兄ヤンが行った先は、三つ年上の女の子の家だった。一緒に遊ぶ男勝りのマイコの家だった。

――ここで何するん？

――風呂をのぞくんじゃ、ばかたんが。

ばかたんがというのは兄ヤンの口癖で、言葉の最後に必ずくっつく言葉だ。

マイコの家の風呂なら何度かのぞいたことがあった。風呂は家の外にあり、五右衛門風呂を、刈萱を編んだ囲いで覆っただけのものだから、のぞこうと思えばどこからでものぞけた。

電気もないから、明るいうちでないと、月明かりだけが頼りとい

うことになる。

そこには四十代の後家さんと、深窓の姫君が三人いて、マイコは一番下で、一番痩せていたらしい。

――お前、大人の女の裸、見たことねえじゃろ、ばかたんが。

――母ちゃんのなら……。

――よう見たんか。

という会話があったかどうか、兄ヤンの狙いは、一八歳と二一歳の豊満な姉妹だった。

吾一は体のいい見張り役だった。

結局その日は、四十代の後家さんとマイコが風呂に入っただけだったという。

またある時、兄ヤンが街に映画観に連れて行ってやるといった。そうして、テケ・テケ・テケ――とエレキを弾く仕草をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6374x/>

〈山羊を愛した男〉

2011年12月19日18時51分発行